

## 「ヨハネによる福音書」を読む 第4回 ヨハネ福音書 第7～8章

2009年7月19日（東京 新宿）

奥田 昌道

私たちの人生の力として読む 仮庵の祭り 全部神さまで自分からはからっぽ 律法は人を活かすもの 安息日問題 この人はメシアか 私も石打ちにしない イエスは世の光 わたしはある 本当の自由とは何か 律法と約束 霊と肉の二重人格 イエスの生命と一緒に生きていく自由 初めに十字架の贖いありき 祈り

### ● 私たちの人生の力として読む

皆さん、よくいらつしやいました。今、歌いました讚美歌534番「飼い主わが主よ」は私の大好きな讚美歌です。それから、285番「主よみ手もて」は私の生涯を貫く讚美歌と言っている。この285番こそ我が道、私の目指すものという気持ちを非常に強く持っています。またこれは主キリストご自身の歩まれた道です。

〔註：讚美歌285番「主よみ手もて」〕

1. 主よ、み手もてひかせたまえ、  
いかに暗くけわしくとも、  
ただわが主の道をあゆまん。
2. ちからたのみ知恵にまかせ、  
ゆくてはただ主のまにまに  
みむねならばわれいとわじ。
3. 主よ、飲むべきわがさかざき、  
よろこびをもかなしみを、  
われと道をえらびとらじ。  
ゆだねまつり正しくゆかん。  
えらびとりてさずけたまえ。  
かみのくにとなすためには、
4. この世を主にささげまつり、  
せめもはじめ死もほろびも、  
かみはあらん、主にまかせて。〕

私たちは今、ヨハネ伝をやっていますけれども、ヨハネの福音書を読むときにも、自分が時にはキリストさまの立場に立つて、そのお気持ちになって、それで読んでいく。時代は既に二千年経っています。その当時のことが書かれていて、まだこれから後に十字架という非常に厳しい定めが待っている、そういう状況を前にして書かれた伝記といえますか、ドラマといえますか、そういうものですか。それと今とは違いますけれども、本質的にはいつも自分をその場に置いてみて、二千年後の今、日本のこの時代で私たちが現実になんか活していく中でこれを受けとれば、どういうことになるのか、何を求められているのかという、いつも二つの角度から読みます。

それからもう一つは、キリストはこのヨハネ伝に書かれている状況の中では人間としてあのように生きておられたわけです。その周りにたくさんの方がいて、その間でいろんな



トラブルが発生しています。ところが、今はキリストはもう甦って光輝くお姿で天界にいらつしやるわけです。そして、我々が祈れば、

「二、三人集うところに必ず私も一緒に居るから」

と、この約束がある。だから見えないけれども、ここにも立っていてくださるはずですよ。

「二人、三人、私の名前によって、私の名前の中へと集まってくるところには私もいる。あなた方の世の末まで地の極まで私はあなた方と一緒にいるよ」

という。そのお方はもはや血を流して苦しんでおられない。光輝く愛の姿でいてくださるんです。何の恐れもない。そういうお方をしっかりと自分の生活の中に受けとって、

「私の中にキリストが生きていてくださる、住んでいてくださる」

と、そういう思いで暮らしていかないとね。遠い昔のイスラエルの時代の物語だよということでは遠すぎます。それを突き抜けて、いついずこにおいても、アフリカであろうがシベリヤであろうが日本であろうが、どこへでも直ちに、名前を呼べばスッと来てくださる。見えないけれども、本当に居てくださる。しかも、そのお方の御意は何かというと、

「お前の中に入りたい」

という。これを私は強調したい。ヒルティが、「神と共にある生活」ということを盛んに言いました。

「神のそば近くにあつて有益な仕事をする事、これが人生の幸福だ」

ということを行いました。その中のある箇所に、

「神のそば近くにあること、即ち神の霊がその人の中に宿ること」

と書いてある。これだと思いましたがね。「神の霊」というのはキリストの霊です。キリストは聖霊というお姿で、霊の姿で、我々一人ひとりを宮として——あちらこちらにお宮さんがあり、そこでは神さまもいらつしやるでしょう、うしがみ氏神様とかいろいろあるでしょうけれども——キリストは、

「あなた方はお宮です。あなた方の心を宮として、そこに私は住まうから」

「いいえ、私はそんなあなたをお迎えするような清い人間ではありません」

「何を言っているか。私が清めた。十字架の血潮で全部清めたではないか。きれいに片づけたではないか。旧いあなたはもう死んでいる。私と一緒に生きるんだ。復活は私だけが復活したのではない。あなたも一緒に復活したんだよ」

と。そしてあのペンテコステの聖霊降臨という、ああいう姿で弟子たちに降くだつてこられた。あれは非常にシンボリック（象徴的）ですよ。今、一人びとりの中に、

「主イエス・キリストさまー!」

と名前を呼ぶやいなや——救急車や消防車よりも早いですよ——呼べば直ちに来てくださる。心の中の叫びです。声に出さなくていいですよ。「主よ!」と言えよ、

「おう、あなたの中に居るよ。即いるよ、大丈夫だよ」





いが、わたしを憎んでいる。わたしが、世の行っている業は悪いと証しているからだ。<sup>8</sup>あなたがたは祭りに上<sup>のほ</sup>って行くがよい。わたしはこの祭りに上<sup>のほ</sup>って行かない。まだ、わたしの時が来ていないからである。」<sup>9</sup>こう言つて、イエスはガリラヤにとどまられた。

「<sup>かりいおさい</sup>仮庵祭」というのは、聖書辞典で調べてみましたので、ご紹介したいと思います。

「<sup>かりいお</sup>仮庵の祭りはイスラエルびとの守ったユダヤの3大祭りのひとつ。ある意味では最大の祭りです。後代では重視されるようになった（ゼカ14・16、18）。この祭日の規定は、レビ23・34～43、民29・12～40にくわしい。チスリの月（今の9～10月）の15日から1週間ないし8日間、秋の収穫として、オリブ、ぶどう、いちじくなどを取り入れて、これを感じしつづ年を終わるところの、年末・収穫感謝祭であり、同時に新年祭でもあった。この取り入れの期間中、畑に小屋を建ててそこに住んだ。このように、元来は、農耕暦の行事であったが、のちに出エジプトのイスラエルびとが経験した、荒野の苦しみとさすらいの天幕生活を記念するための、民族的・信仰的解釈が加えられて、祭りの期間中、野外に木の枝などで仮住居を造つてそこに住むという行事になった（ネへ8・14～17）。これは、神の導きと守りを記憶し、また、この世が仮の住居であることを告白するしるしであった。会堂では伝道の書が読まれ、神殿では盛んな犠牲祭儀が連日おこなわれ、さらに律法の朗読年間計画の最後を読み終わる日として重視され、「ジムハト・トラー」（律法の喜び）の日と呼ばれた。農耕暦は律法暦の意味をもつようになったのである。またこの祭りの終わりの日には、雨の恵みを求める祈りがなされ、シロアムの池から水をくんで注ぐ行事がなされた。イエスがこの日に、水の説教を行ったことは意味が深い（ヨハネ4章）。」

イエスが、

「**誰でも渴いている者は私の所へ来るがよい**」

と、それが7章の後半部に出てくる。仮庵<sup>かりいお</sup>の祭りというのは要するに、秋に9月から10月の期間の1週間ないし8日間ぶつとおして行われたということです。それで皆が行くわけです。ところが、イエスはのぼつて行かれない。

「**まだ私の時は来ていないから**」

ということ、じつと留まっておられる。兄弟たちが出かけて行くと、すぐに独りしのびやかに祭りに行かれるということです。これだけを見ても、イエスという方はなんと孤独な方であるか。兄弟からも信じられていない。兄弟たちはこの世的な考えで、

「お前さんがいろんな宗教的な御業を行つて、人々を引っ張つていこうとするなら、チャンスではないか。出かけて行つて演説やつて来い」

と。イエスは、



「私の時はまだ来ていない」

と言って断っている。イエスは度々、「私の時はまだ来ていない」と、「私の時」ということを言っておられる。これは全部、神さまに任せきっていらつしやる。自分の思いで動かない。すべて御意に従って動いて、御意をちゃんとキャッチしておられる。我々がそのくらいはつきり御意をキャッチできたら、もうこれは言うことはないんですけれども、なかなか「これが御意なんだよ」と言えずに、悩んだり迷ったりすることがあります。でも、御意を求めて生きるという、その基本線は守る。さっきの讃美歌285番の心を心として、

「主よ、私にはあなたの御意が何であるか、はつきりわかるわけではありません。けれども、あなたに導いてくださることをお願いいたします」  
という気持ちでいけば、それでよろしいと思います。

「<sup>10</sup>しかし、兄弟たちが祭りに上って行ったとき、イエス御自身も、人目を避け、隠れるようにして上って行かれた。<sup>11</sup>祭りのときユダヤ人たちはイエスを捜し、「あの男はどこにいるのか」と言っていた。<sup>12</sup>群衆の間では、イエスのことがいろいろときささやかれていた。「良い人だ」と言う者もいれば、「いや、群衆を惑わしている」と言う者もいた。<sup>13</sup>しかし、ユダヤ人たちを恐れて、イエスについて公然と語る者はいなかった。

もうユダヤ人たちは、イエスを捕まえて殺すと決めていた。だから、イエスのことを公おおやけには言えない。ひそひそといろんな噂話うわさをしているという状況です。

<sup>14</sup>祭りも既に半ばになったころ、イエスは神殿の境内に上って行って、教え始められた。<sup>15</sup>ユダヤ人たちが驚いて、「この人は、学問をしたわけでもないのに、<sup>16</sup>どうして聖書〔旧約聖書〕をこんなによく知っているのだろう」と言うのと、<sup>16</sup>イエスは答えて言われた。「わたしの教えは、自分の教えではなく、わたしをお遣わしになった方の教えである。<sup>17</sup>この方の御心を行おうとする者は、わたしの教えが神から出たものか、わたしが勝手に話しているのか、分かるはずである。<sup>18</sup>自分勝手に話す者は、自分の栄光を求める。しかし、自分をお遣わしになった方の栄光を求める者は真実な人であり、その人には不義がない。<sup>19</sup>モーセはあなたたちに律法を与えたではないか。ところが、あなたたちはだれもその律法を守らない。なぜ、わたしを殺そうとするのか。」<sup>20</sup>群衆が答えた。「あなたは悪霊に取りつかれている。だれがあなたを殺そうというのか。」<sup>21</sup>イエスは答えて言われた。「わたしが一つの業を行ったというので、あなたたちは皆驚いている。

これは38年間、病で池のほとりで苦しんでいる人をイエスは癒されました。

「<sup>21</sup>床とこを取り上げて歩みなさい」

と言われた。そうしたら、直ちに癒えて、床を取り上げて歩きだした。ところが、ユダヤ



人たちは、その癒してくれた方がイエスだということを告げ口したわけです。それでイエスは公然と人の中を歩くことができなくなつたということが5章の所に出ていました。これを指しているのだと思います。

●全部神さまで自分からはらつぽ

22 しかし、モーセはあなたたちに割礼かっれいを命じた。——もつとも、これはモーセからではなく、族長たちから始まつたのだが——  
アブラハムが祝福されて、

「あなたの子孫は空の星のごとく増え広がるよ」

という祝福の言葉を受けて、アブラハムはそれを「はいっ」と素直に受けとつた。それがアブラハムの信仰ということ、神さまは大変喜ばれた。

「アブラハムはヤハウエーを信じた。ヤハウエーはこれをアブラハムの義と認められた」

と。祝福を与えて、その徴として「割礼を受けなさい」と言われた。そしてそれは永遠の定めだということ、代々それを守つてきた。モーセにも受け継がれたというわけです。

だから、あなたたちは安息日にも割礼を施している。23 モーセの律法を破らないようにと、人は安息日であつても割礼を受けるのに、わたしが安息日に全身をやしたからといって腹を立てるのか。24 うわべだけで裁くのをやめ、正しい裁きをしなさい。」

ここに二つの問題がありますね。一つは

「イエスの教えは自分から出たものか、神さまの教えか」

ということ。それから、「安息日」の問題。その前半分の、

「わたしの教えは、自分の教えではなく、わたしをお遣わしになつた方の教えである。17 この方「私をお遣わしになつた方」の御心を行おうとする者は、わたしの教えが神から出たものか、わたしが勝手に話しているのか、分かるはずである。」

と。これはとても大事です。いろんな宗教家がいろんなことを語ります。それからまた、私たちがいろんな方にキリストのお話をしようとしたり、伝道めいたことをやろうとする。その時に必ず、

「それが神から出たという、神の教えだという証拠はどこにあるんだ？ 人の言い伝えではないのか？」

と、いろんなことを言つて批判いたします。世の中に評論家が非常に多いんです、特に知識人の中には。私は比較的知識人の方々と話す機会があるけれども、だいたい評論家です。それで私は、



「あなたは本当に神さまの御意にかなおうと思って、神さまの御意を求めて生きようと思うならば、虚心坦懐きよしんたんかいにイエスという方が言っておられる言葉を受けとつてごらん。そうしたら、これが本ものか偽にせものかきつとわかるよ。それ以外に証明手段はない」

と言う。ヒルティも同じことを言っています。

「神の証明とか、イエスはこういう人間かという証明を、いろんな歴史的なことに求めても無駄だ。それよりも、そこで働いていることが本当に神から出たものか、それとも人間的な智慧から出たものかということは、あなた自身が本当に神の御意を求めるという気持ちでぶつかっていった時にはつきりわかる」

と。私はそれだけなんです。イエスという方が本当に素晴らしいのは、決して「私は信仰が強いから、神さまをつかまえた」とか、そんなことは全然言っていない。

「自分はただただ、神さまから遣わされてこの世にやって来た」

とイエスは言われる。我々はどうやってこの世に生まれたんでしょうね。「オギャー」と生まれて、両親がいるわけです。それが我が意志なのか、誰の意志なのか、さっぱりわからない。さっぱりわからないけれども、とにかく生まれてきたのは確かです。そして、生長していくわけです。このイエスという方は、なるほど生まれはマリアさんのお腹から生まれてきた方だけでも、ご自分の自覚としては、

「私をこの世に遣わされたお方、その方が私をこの世に生み出した。だから、自分にとつて一番大事なのは、私をこの世に遣わされたその源である父なる神さま、そのお方の存在、そしてそのお方が何を願っておられるか。何を私に命じておられるか。それだけが大事なんだ。わが思いというのは一切ない」

と。ここまで徹底するというのは大変ですよ。だいたい、自我の塊かたまりなんです、人間というのは。自我のない人間なんていうのは全然問題にされない。

「自我のない人間なんて未成熟だ、早く自立（自律）しなさい。自立は自己決定ができることだ、自分で何でも判断するんだ」

と。そういうことを盛んに教育してくるわけですよ。

「いや、私は自分の思いはありません。神さまです」

と言うと——本当に「神さまを知っている」と言ったら、「それは凄い」ときつと言うでしょうけれども——そうでない人には、

「なんだ、お前。己れというものがいいのか、自己というものがいいのか。自立心がないのか!？」

と、バカにしますよね。ところが、この方は全くそれに徹しておられる。それに徹しておられる方から凄い御業みわざが流れてきていますよ。そして、それを

「これは私の業わざではない。父が私の中で御業を行っておられる。私が語っているこ



とはみな、『話せ』と仰ることを伝えているだけだ。私は水道の管くだのようなもので、天の水が私を通して皆さんの所へ流れていく。それが皆さんを活かしていく生命を与える水なんだ。だから、私の所に来てそれを飲みなさい」

と、そういうことを言っておられる。ご自分が何者かということは一切主張しておられない。これだけでも凄いですよ。そこを小池辰雄先生は「無」という形でとらえられた。

「キリストは無者むじやである」

と言う。何も無い。私が無い。無私。私心がない。私がない。全部神さま、オール神さま。自分からはらつぽ。そのからつぽな姿、それを神さまは喜ばれた。こんな方は今まで世の中にいなかった。だから、ヨルダン川で洗礼のヨハネからバプテスマを受けられた時、水から上って祈っておられたら、天が開けて聖霊が鳩の如く降くだってきた。あるいは、「滝の如く降ってきた」と書いてある本もあるそうです。

「お前こそ、私は待っていた。未だ歴史上にそんな者はいなかった。お前はわしの子だ」

と言って抱きしめた。これが祝福なんです。しかし、それで「めでたし、めでたし」ではなかった。

「さあ、これから荒野に行つて、サタンと闘うんだ」

と、御霊に追いやられて荒野に行かれて、四十日四十夜、そこでサタンに勝つて、それから伝道が始まった。そのことだけでも凄く思われませんか。それは宗教的な修行をやる方はありますよ、「千日回峰かいほう」なんて比叡山で修行する人も本当に超人的な修行だと思ふけれども、私は全然驚かない。それはやはりイエスの、

「自分ではない。あなたです。あなたの御意みこころだけです」

と、そこへ全部献げきつている方の生き方。これを「義」というんです。「御意が全てであります」と言っている生き方。これが神さまから見た義なんです。自己主張が「罪」なんです。これは小池先生がつかまえられた。ヒルティは何と言っているかというのと、

「罪とは神さまに逆らうような思いのすべて、これが罪だ」

と言っている。神さまに逆らおうする心の動き、思い、そのものが罪だという。「あれをした、これをした」ということは、ヒルティは言わない。そういう心の傾向、神さまと相反あひするような心の傾向、それが罪だという。それがないような人間なっておりますか。それがない人間はイエスだけでしょ。

「神さま、あなたがすべてです。命よりもあなたが大事です」

と。それは四十日四十夜断食したら、もうお腹なかもぺこぺこ、骨皮筋衛門だと思えますよ。私は自分でやったことがないけれども、サンダー・シングはやったんですよ。彼はイエスがなされたことと同じようなことをやった。だから、彼は本当に凄い方です。

イエスは四十日四十夜断食して、もうお腹なかがぺこぺこ、その時にサタンがやってきて、



「あなたは神の子だろ、その石ころをパンに変えてみる。そしたら、人々は喜ぶよ。あなたを生き神様だと言って崇めるよ」

と言ったら、イエスは、

「人はパンのみに生きるにあらず。神の御口から出る一つ一つの言葉が生命だ」

と、断乎拒否された。イエスのなさっていることは全部、裏づけられていますから。自分の生活から出ていますから、理論ではない。だから、イエスを批判する人はイエスと同じ生活をしてみて、それから批判しろと私は言いたい。評論家はだめです。ところが、日本の知識人は評論家がウロウロしてます。そして最後に何と云うかというところ、

「どこへ登るのも、富士山に登るにも、頂上へはいろんな道がある。どれだつていい。仏教であろうと、何々教でもいい。結局はみな頂上へ至るんだ」

と言う。

「では、あなたはどれですか？」

「いや、私は登らない」

と言う（笑）、それが日本の知識人ですよ。そうかと思うと、

「日本は自然が豊かに恵まれている。自然の中に神がいる。その自然と一つになるところで安住できる。イスラエルは砂漠だから、厳しい酷い宗教がそこで生まれる。日本は非常に温和だから戦いを好まない。日本では、『如月の春の宵に桜の下に死のう』という、これがいいんだよ」

〔註「ねかはくは花のしたにて春しなん そのきさらきのもちつきころ」（山家集）

と。私は、

「あなたはそれでいいの？」

と聞きたい。そうすると、

「死んだあと、どこへ行くか、そんなことは考えたこともない」

と平然と仰います。私はそんなことではとても満足できない。そんな

「土から出て、土に還ってお終い」

では、120歳まで生きたって、やはり私は寂しいなとずうつと思っていました。日本人というのはそんなに諦めがいいかと思ったら、やはり最期はもがきます、

「死にたくない！」

とか。終わりにになると、

「身体が弱ってくる。夢も希望もない」

とか言う。どんなに賢い人でも全然変わりませんよ、人間としては本当に。賢いほどむしろ苦しみます。「俺は賢かったのに！」というプライドがあるから。人間というのは、そういうのが人間でしょ。だから、



「そういう突き抜けた永遠の生命、向こうの輝く世界を私はあなた方に無条件にあげるよ」

というのがイエスというお方なんです。聖旨みむねなんですもの。向こうが熱い思いを我々一人ひとりに語りかけられている。それを「ノー！」と言うのは勿体ないことです。向こうがプロポーズ（提案、求婚）してくださっているんです。プロポーズに対して私は何をもって答えるか。

「はい、あなたをいただきます！」

と、これでいい。プレゼントはもらわないとだめですものね。私は本当に日々にもらっているわけです。

### ●律法は人を活かすもの

「わたしの教えは、自分の教えではなく、わたしをお遣わしになった方の教えである。この神さまの御心を行おうという気持ちでぶつかってきてごらん。そうしたら、わたしの語っていることが本ものか偽りかがわかるよ」

と。これを一つのリトマス試験紙というふうに見てくださいいね。そして、

「<sup>18</sup>自分勝手に話す者は、自分の栄光を求める。しかし、自分をお遣わしになった方の栄光を求める者は真実な人であり、その人には不義がない。」

と。それから次に「律法」という問題が出てきます。律法というのはいったい何なのでしようかということ。イスラエル人たちは「律法、律法、律法」と言う。さつき、「仮庵かりいおの祭り」が律法暦、律法の祭りに変ったとありました。初めは農耕の感謝の祭りからだんだん律法を喜ぶ律法の祭りに変った。いったい、律法とは何なのですかと——ひっくり返せば「法律」なんですけれども——律法学者は法律学者だと思つていい。あの時代は、宗教も法律も道徳も全部一つですから。

だから、次の8章にいけますと、

「姦淫の現場で捕まえられた女を石打ちにしていますか」

と、イエスの所へ問答してきます。姦淫というのは罪に違いないけれども、石打ちというのは酷いじゃないですか。でも、あの頃は宗教と法律と道徳は渾然一体ですから、そう命じられているわけです。そういう姦淫を犯すような者はイスラエル民族に相応ふさわしくないと、それを民族から排除せよという、排除の論理です。石打ち、そういう律法です。

「律法というのは人を審いて、人を殺すものか」

と、こう尋ねたいですね。ところが、イエスはそうは受けとられなかった。

「律法は活かすものだ」

と。神さまは人を活かそうとなさっている。人を殺す、人を死に至らしめるものを除けて、生命への道を示す。生命への道はこの律法を守つて、律法には神の御意が表われているん



だから、

「この律法を本当に生きていくなら、人は生きられるんだよ」

ということを抑ったはずですが、ところが、その律法を厳格に守りますと、審く方へと行く。ちよつとでも律法違反したらチエック（摘発）、そしてパニッシュ（処罰）。こういう形で人の生活を脅かす方へいくわけです。指導者たちは何かというと、自分たちは心では「律法なんてクソくらえ」と思っているくせに、形式的なところだけ厳重に守っている。そして違反があればすぐ摘発する。それに対してイエスは公然とそれに挑戦していかれた。

「本当の律法というのは生命を与えるものである。それをあなた方は死に至らしめるものにしてしまっている。人をがんじがらめに縛って、ちよつとも活かそうとしない」

と。だから、イエスはあえて安息日という律法を破られたわけです。心の中の問題というのはなかなか、心の中は覗けません。でも、

「安息日には何もしてはならない」

という律法というのは、何かやっているとすぐ「ほら、安息日違反だ！」とパツと言えるわけです。スピード違反ならパツと言えるでしょ。そういうふう摘発しやすいのが安息日違反なんです。イエスは安息日に人を癒しておられた。そうすると、彼らは

「安息日違反だ！ 神に対する反逆者だ」

と言って、イエスを殺そうと謀る。これが安息日問題なんです。

### ●安息日問題

この安息日の問題のことをちよつと調べてみました。福音書は他にもマタイ、マルコ、ルカと三つありますけれども、三つ見ているとややこしくて大変なので、ルカの福音書の所からだけ探してみました。ルカ福音書の6章をみますと、まず麦畑をイエスが弟子たちと一緒に通る場面が出てきます。弟子たちが麦の穂を摘んで、それを揉みながら食べたというのがあります。それをユダヤ人たちは安息日違反だといって咎める。その時にイエスは何と言われたかというところ、

「安息日は、人が安息日のためにあるのか、安息日は人のためにあるのか？」

と。法律はいつたい人を活かすためにあるのか、人が法律に縛られるためにあるのか、というのと一緒です。イエスは、

「人の子は安息日の主である」

と言われた。安息日という律法は人を活かすための律法だ、人を縛って不自由にして苦しめるものではない、ということをはつきり言われた。

「安息日において私が主である」

と言われた。そういうことが6章に出てきます。それからそのすぐあとに、「右手のなえた



人を癒す」という場面が出てきます。ルカの6章6節から11節です。

「6また、ほかの安息日に、イエスは会堂に入って教えておられた。そこに一人の人がいて、その右手が萎<sup>な</sup>えていた。7律法学者たちやファリサイ派の人々は、訴える口実を見つけようとして、イエスが安息日に病気をいやされるかどうか、注目していた。

この右手が萎えた人が、なぜこの会堂にいたのか、その理由は書いてません。ひよつとしたら、ユダヤ人たちがその人をわざわざ会堂へ連れて行って、

「イエスがどうするか見ようじゃないか」

と、見張っていたのかも知れません。

8イエスは彼らの考えを見抜いて、手の萎えた人に、「立って、真ん中に出なさい」と言われた。その人は身を起こして立った。9そこで、イエスは言われた。「あなたたちに尋ねたい。安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか。」

つまり、命を救うことは善を行うこと、滅ぼすことは悪を行うこと。イエスはそう受けとっておられる。

10そして、彼ら一同を見回して、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。言われたようにすると、手は元どおりになった。11ところが、彼らは怒り狂って、イエスを何とかしようとして話し合った。」（ルカ6・6～11）

これが当時の宗教家たちの姿です。それから同じルカの13章にいけます。10節から、

「10安息日に、イエスはある会堂で教えておられた。11そこに、十八年間も病の霊に取りつかれていてる女がいた。腰が曲がったまま、どうしても伸ばすことができなかった。12イエスはその女を見て呼び寄せ、「婦人よ、病気は治った」と言って、13その上に手を置かれた。女は、たちどころに腰がまっすぐになり、神を賛美した。14ところが会堂長は、イエスが安息日に病人をいやされたことに腹を立て、群衆に言った。「働くべき日は六日ある。その間に来て治してもらおうがよい。安息日はいけない。」15しかし、主は彼に答えて言われた。「偽善者たちよ、あなたたちはだれでも、安息日にも牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて行くではないか。16この女はアブラハムの娘なのに、十八年もの間サタンに縛られていたのだ。安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったのか。」17こう言われると、反対者は皆恥じ入ったが、群衆はこぞって、イエスがなさった数々のすばらしい行いを見て喜んだ。」（ルカ13・10～17）

と。こうあります。それから、14章1節から、

「1安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家



にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。<sup>2</sup>そのとき、イエスの前に水腫を患<sup>すいしゅ</sup>っている人がいた。<sup>3</sup>そこで、イエスは律法の専門家たちやファリサイ派の人々に言われた。「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか。」<sup>4</sup>彼らは黙っていた。すると、イエスは病人の手を取り、病気をいやしてお帰しになった。<sup>5</sup>そして、言われた。「あなたたちの中に、自分の息子が牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか。」<sup>6</sup>彼らは、これに対して答えることができなかった。」（ルカ14・1～6）

こういうふうにならぬ所、安息日での病の癒しというのが出てくる。そこでイエスの姿は一貫しています。安息日は神さまの御業を受ける日だと。ウィークデイ（平日）は、自分たちが一生懸命に働く。安息日は、今度は自分たちは業を休めて、神さまのお働きをしつかり受けとる。これが安息日なんだ。

「神さまの働きは、人を癒す、人を活かすというのが一番の神さまの御意なんだ。それを神さまから遣わされた自分が実践してどこが悪いのか。あなた方の律法とこの人は人を殺す律法なのか、人を活かす律法なのか」ということを訊かれた。しかし、これは二千年前の話ではないですよ。今の時代、日本でも法律の運用というのはいかに人を苦しめてきたかということがあります。

杓子定規しやくしじょうぎに何でもかんでも適用して、融通がきかない。「5時締め切り」といったら、1秒過ぎても

「5時です、だめです!」

と。それを「いいよ、いいよ」といったら、

「あれは法律を守らない。けしからん」

なんて。そこは弾力性というのがやはりありますよね。杓子定規にやったら全然うまくいかない。そういうのがあちらこちらに、「お役所仕事だ」とかいうのがある。仕事をやめる時間だけはきちつと守って、出勤する方はだらだらとしている。公務員の働き方についていろいろ批判がありましたね。

とにかく、律法を法律というのにおきかえますと、いったい法律は誰のどういう何を守ろうとしているのかという、その原点に立ち返って、そこでやらなければ大変な間違いを犯すということも反省材料ではないだろうかと思えます。それから、イエスはヨハネ伝のところでも「上辺うわべによつて審さばくな」ということを言われましたね。

「上辺うわべだけで審さばくのはやめ、正しい審さばきをしなさい」

と。「上辺で審く」というのはどうということかというのと、結局、別な言い方をしたら、外的なもの、言葉、外形的なものに対して、心という見えない、内にあるもの、内なるもの、隠れた奥にある本当のものという、そういう受けとり方をしていただいたら、よろしいの



ではないかと思えます。

ルカの11章をみていただきましょう。37節。食事の前に手を洗うという習慣、律法があった。その問題が出ています。

「37 イエスはこのように話しておられたとき、ファリサイ派の人から食事の招待を受けたので、その家に入って食事の席に着かれた。38ところがその人は、イエスが食事の前にまず身を清められなかったのを見て、不審に思った。39主は言われた。「実に、あなたたちファリサイ派の人々は、杯や皿の外側はきれいにするが、自分の内側は強欲と悪意に満ちている。40愚かな者たち、外側を造られた神は、内側もお造りになったではないか。41ただ、器の中にある物を人に施せ。そうすれば、あなたたちにはすべてのものが清くなる。42それにしても、あなたたちファリサイ派の人々は不幸だ。薄荷や芸香<sup>はっか</sup>やあらゆる野菜の十分の一は献げるが、正義の実行と神への愛はおろそかにしているからだ。」

「正義の実行と神への愛」は内なる見えないものです。「献げる」ということは、「十分の一は、これだけです」といって、献げるといふのはすべて外から見えますから、これはしつかりやっている。ところが、正義の実行と神への愛はおろそかにしている。

これこそ行すべきことである。もとより、十分の一の献げ物もおろそかにしてはならないが。43あなたたちファリサイ派の人々は不幸だ。会堂では上席に着くこと、広場では挨拶されることを好むからだ。44あなたたちは不幸だ。人目につかない墓のようなものである。その上を歩く人は気づかない。」

相当ひどいことを言われていますが。

45そこで、律法の専門家の一人が、「先生、そんなことをおっしゃれば、わたしたちをも侮辱することになります」と言った。46イエスは言われた。「あなたたち律法の専門家も不幸だ。人には背負いきれない重荷を負わせながら、自分では指一本もその重荷に触れようとしなからだ。」

これも私の大好きな言葉ですね。私はかつて若い頃に、いろんないくつかの教会の牧師の先生の話を聞いた。まことに立派なんですから、人の重荷に指一本触れようとしていないのではないかという印象を受けました。立派なことを言う前に、まず人の中に入って、その人と苦しみを一緒にして、その人を救い上げる。それからしか始まらないのではないか。ところが、上から立派なことをいろいろ仰って、

「できないのは、信仰がないからだ」と言う。ここの、

「あなたたちは人には背負いきれない重荷を負わせながら、自分では指一本もその重荷に触れようとしない」



ということをおもったことがあります。

47 あなたたちは不幸だ。自分の先祖が殺した預言者たちの墓を建てているからだ。48 こうして、あなたたちは先祖の仕業しわざの証人となり、それに賛成している。先祖は殺し、あなたたちは墓を建てているからである。」(ルカ11・37)

48)

いろいろそういうことを手厳しく仰っています。この「内なるもの」、これは心です。これは何かというと、イエスのあの「山上の垂訓」のところにきちんと表われています。律法を外側から守るようなことではない。本当に心の中からそれをやっているならば、何の意味もないということをお仰った。

「心の中で人を憎むことは殺人と同じだ」

ということをお言われた。そんなことを言われたら、「私は人殺しではありません」なんて誰も言えなくなる。「憎む」ということがもう、それが嵩こもじていけば殺人につながってしまう。まず「心の中で人を憎む」ということが起こることということがだめなんだと。それから、男の人にとっては、

「色情をいだいて女性を見るのは既に姦淫したのと同じだ」

と、そういうことも言われたでしょ。そのようにすべてを内面化して本当の心の姿で、為しないのが神さまの御意とピタッと一致していればいいんだけど、そうでなければ、いくら外側で繕つくろっていても、それは偽善という。そんなものは何の価値もないということをおズバズバ言われるものだから、何とかしてイエスをやっつけようとする。それで安息日違反を摘発しようとした。そしたら、美事に押し返されています。でも、押し返されても、彼らは納得しない。狂気のごとくなって、いかにかけてイエスを滅ぼそうと、イエスを殺す相談をますます盛んにやるようになったというのが流れです。

●この人はメシアか

その先の「この人はメシアか」という、ヨハネの7章25節にいきます。

「25 さて、エルサレムの人々の中には次のように言う者たちがいた。「これは、人々が殺そうとねらっている者ではないか。26 あんなに公然と話しているのに、何も言われない。議員たちは、この人がメシアだということを、本当に認めたのではなからうか。27 しかし、わたしたちは、この人がどこの出身かを知っている。メシアが来られるときは、どこから来られるのか、だれも知らないはずだ。」28 すると、神殿の境内で教えていたイエスは、大声で言われた。「あなたたちはわたしのことを知っており、また、どこの出身かも知っている。わたしは自分勝手に来たのではない。わたしをお遣わしになった方は真実であるが、あなたたちはその方を知らない。29 わたしはその方を知っている。」



わたしはその方のもとから来た者であり、その方がわたしをお遣わしになったのである。」<sup>30</sup>人々はイエスを捕らえようとしたが、手をかける者はいなかった。イエスの時はまだ来ていなかったからである。<sup>31</sup>しかし、群衆の中にはイエスを信じる者が大勢いて、「メシアが来られても、この人よりも多くのしるしをなさるだろうか」と言った。

<sup>32</sup>ファリサイ派の人々は、群衆がイエスについてこのようにささやいているのを耳にした。祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスを捕らえるために下役たちを遣わした。<sup>33</sup>そこで、イエスは言われた。「今しばらく、わたしはあなたたちと共にいる。それから、自分をお遣わしになった方のもとへ帰る。<sup>34</sup>あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない。」<sup>35</sup>すると、ユダヤ人たちが互いに言った。「わたしたちが見つけることはないとはい、いったい、どこへ行くつもりだろう。ギリシア人の間に離散しているユダヤ人のところへ行つて、ギリシア人に教えるともいえるのか。<sup>36</sup>『あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない』と彼は言ったが、その言葉はどういう意味なのか。」（ヨハネ7・25～36）

イエスを見ていろんな噂うわさだとか、またイエスが何かお答えになると、それを表面的に受けとるものだから、ますますそこに混乱の渦が湧いています。こういう問答をみると、いかにイエスという方の心と、彼らがイエスというお方を見ている見方がまるで平行線だということがわかります。彼らは外側ばかりを見ている。イエスのなさっている御業、語っている言葉の真実性、それに打たれて、「お赦しください」と誰も言わない。群衆は信じたといつても、次の瞬間はまた問答をふっかけている。時々、奇蹟のようなことに対しては驚いています。けれども、この人はいったい何ものなのか、群衆を惑わしているのか、それとも神さまからのものなのか。それを内面から見ようとしなさい。まず聖書を調べて、「メシアはどこから出てくるのか、ベツレヘムなのか、ナザレなのか、どこからなのか」

と、そういう聖書研究はやっている。そうやって外側からばかり、

「この人は本ものだろうか、偽にせものだろうか」

と。今の評論家もそんなわけですね。自分がその中に入って、その方と同じ思いになって、その方が「私をお遣わしになった方」といって崇あがめておられる方に本気でつながろうとして、イエスと同じ気持ちになれば、もう少しその方の本質が見えていたはずだと思っただけでも、そうでなくて、文献研究をやつて

「この人は本ものか、偽ものか」

とやっている。それから、イエスは



「私はやがてこの世を去って行く。あなた方は探しても、もう見つけることはできない」

というのは、十字架・復活を指しておられる。ところが、そんなことは全然わからないから、「どこかギリシア人の所へ逃亡しようとするのか、亡命しようとしているのだろうか」

と、そういうふうな見方しかしていない。

このイエスが「私はどこへ行くのか」というところを、文語訳でいいますと、33節、

「33 イエス言い給う『我なお暫く汝らと偕に居り、而してのち我を遣し給いし者の御許に往く。34 汝ら我を尋ねん、されど逢わざるべし、汝等わが居る処に往くこと能わず』」(ヨハネ7・33～34)

イエスという方は、私は「かぐや姫」を思うんです。かぐや姫は竹の中から生まれるけれども、もともとは月から来たんですよ。だから、満月の夜にかぐや姫は月に帰って行くとする。お爺さんお婆さんはとても悲しんで、かぐや姫を帰したくないので、天皇さんにお願ひして、いろんな軍勢を率いてそれを引き止めようとするけれども、眩い光に照らされて何もできなかった。それでかぐや姫は迎えられて、天に昇っていったというお話がありますね。かぐや姫はお爺さんお婆さんに

「私は月から来たから、月へ帰らなければなりません。永い間お世話になりました」

というわけです。イエスがそうなんです。神さまのもとから来た。そして地上で果たすべき役割を果たしたら、また天へ帰っていく。これはイエスという方の宿命、運命なんです。それを言っておられるのに、

「どこぞ、ギリシアへでも行くのだろうか?」

とやっているわけですよ。誰にも理解されないお方です。

「37 祭の終の大なる日に、イエス立ちて呼わりて言いたもう『人もし渴かば我に來りて飲め。38 我を信する者は、聖書に云えるごとく、その腹より活ける水、川となりて流れ出づべし』39 これは彼を信する者の受けんとする御霊を指して言い給いしなり。イエス未だ栄光を受け給わざれば、御霊いまだ降らざりしなり。」(ヨハネ7・37～39)

口語訳で読みますと、

「37 祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。38 わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」39 イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている『霊』〔聖霊〕について言われたのである。イエスは未だ栄光を受けておられなかったので、『霊』がまだ降っていないからである。」



人々に霊が降らなかつた。先のことを予告して言われた。これはさつき、水のことかりいおが仮庵の祭りで言われていた。

「この祭りの終わりの日には、雨の恵みを求める祈りがなされ、シロアムの池から水をくんで注ぐ行事がなされた。イエスがこの日に、水の説教を行ったことは意味が深い」

と註解書には出ている。私はなぜこの「仮庵の祭り」の時にこんなことを突然仰つたのかと思つたら、この仮庵の祭りという祝いによつたという。これはなるほどと思つた。もう既にあのサマリアの女との問答の中でも、

「この井戸から飲む者はみな渴く。しかし、私から溢れ出る、私が与える水を飲む者は永遠に渴くことがない」

と言われました。ここではまた、

「私を信ずる者はその人のお腹なかの中から聖霊が流れ出る。人々は驚く」

ということを予告されたわけです。

「<sup>40</sup>この言葉聞いて、群衆の中には、「この人は、本当にあの預言者だ」と言う者や、<sup>41</sup>「この人はメシアだ」と言う者がいたが、このように言う者もいた。

「メシアはガリラヤから出るだろうか。<sup>42</sup>メシアはダビデの子孫で、ダビデのいた村ベツレヘムから出ると、聖書に書いてあるではないか。」<sup>43</sup>こうして、イエスのことで群衆の間に対立が生じた。<sup>44</sup>その中にはイエスを捕らえようと思う者もいたが、手をかける者はなかつた。

<sup>45</sup>さて、祭司長たちやファリサイ派の人々は、下役たちが戻つて来たとき、「どうして、あの男を連れて来なかつたのか」と言つた。<sup>46</sup>下役たちは、「今まで、あの人のように話した人はいません」と答えた。<sup>47</sup>すると、ファリサイ派の人々は言つた。「お前たちまでも惑わされたのか。<sup>48</sup>議員やファリサイ派の人々の中に、あの男を信じた者がいるだろうか。<sup>49</sup>だが、律法を知らないこの群衆は、呪われている。」<sup>50</sup>彼らの中の一人で、以前イエスを訪ねたことのあるニコデモが言つた。

ここでニコデモさんが登場しました。夜こつそりイエスの所にやつて来て、

「あなたの行つておられる徴は神さまが一緒でないとしてもできつこありません」

ともちあげた。そうしたら、

「よくよく言つておく。人は霊から生まれなければ、上から生まれなければ、

神の国に入ることができない」

と言われたから、ニコデモは全くパニックに陥つたという話が出ていましたね。そのニコデモがここで活躍します。



51 「我々の律法によれば、まず本人から事情を聞き、何をしたかを確かめたうえでなければ、判決を下してはならないことになっていないではないか。」  
52 彼らは答えて言った。「あなたもガリラヤ出身なのか。よく調べてみなさい。」

ガリラヤからは預言者の出ないことが分かる。」（ヨハネ7・37～52）  
こんなふうには、何事もすべて文献によって確定しようとしているわけですが。でも、ニコデモさんはさすがにイエスの所にきて感動しました。だから、この場面で、

「いや、そんな簡単に審かないで、本当に本人からしつかり理由を聞かないとだめです。それが律法が命じていることではないですか」

と言ったんだけど、彼らは

「お前もとうとう彼の弟子になったのかね」

というくらいに、ニコデモを蔑さげすんだような言い方をしています。

### ●私も石打ちにしない

ここまでが第7章です。その次は第8章へいきます。第8章は括弧に入っている。姦淫の女性が捕まえられた場面というのは括弧に入れられて、どこからこれが入り込んだかということは別にしまして、ちょっと文脈からいいますと、ややこれが孤立している恰好になっていますが、読んでいきましよう。

53 「人々はおのおの家へ帰って行った。

1 イエスはオリブ山へ行かれた。2 朝早く、再び神殿の境内に入られると、民衆が皆、御自分のところにやって来たので、座って教え始められた。3 ここへ、律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦淫の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、4 イエスに言った。「先生、この女は姦淫をしているときに捕まりました。5 こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうかお考えになりますか。」6 イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。イエスはかみ込み、指で地面に何か書き始められた。7 しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」8 そしてまた、身がかがめて地面に書き続けられた。

早朝まだ靄もやの中だと思う。朝早くイエスは神殿で教えておられた。民衆が集まってきた。神殿の境内で教えておられた。そこへ律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦淫の現場で捕らえられた女を連れて来た。これはエゲツないやり方ですよ。だいたい住居侵入ではありませんか。そういう深夜、人の眠る所へズカズカと入りこんで、十手じゅうてを片手に「御用だ！御用だ！」というわけです。女性だけ引つ捕らえてきて——片一方の男性はどこへ行つ



たのか知りません、両者共審かれなければいけないのに——女性だけ捕まえて引きずられて来た。明らかにイエスをやつつけようという悪意の表われです。

「イエスはどうか答えるだろうか」

と。もう逃げ場がないような状況へイエスを追いやろうと、示し合わせてそういうことをやったわけです。なぜかという、モーセは

「神に選ばれたユダヤ民族の中にそういう不屈きな者がいたら民族から排除する」

ことを命じている。それで石打ちの刑にする。イエスは人を助けることを言って、愛を説いておられる。「赦せ」ということをきつと仰るだろう。そしたら、明らかに律法違反になる。またもしも、イエスが、律法に従って石打ちになさるとしますと、

「あれは口頭は愛を説いているけれども、結局は女性を石で撃ち殺したではないか」

と言ってまたイエスをやつつけることができる。どっちからみても、イエスは窮地に立つておられる。皆さんはどうなさいます？ 答えられませんよね。イエスは地面に字を書いておられる。サンダー・シングはその場面を、

「イエスはそこで周りにいる人々の罪をずっと書いておられた」

と、そんなふうに見える。小池先生は、

「何を書いているのかわからない。地面に字を書いておられた」

ということだけを『無者キリスト』の中で説いておられます。どっちにしても、イエスは黙って地面に字を書いておられる。あまりしつこく問うものだから、スックと立ち上がって

「君たちの中で石を投げ打つ資格のある者

つまり自分にやましくない者——「色情をいだいて女性を見たら姦淫したと仰ったその基準に照らして」とは書いてないけれども——

本当に自分の心にやましくない者はまず石をとって投げなさい」

と。そうでない者は投げるはずがない。簡単に

「汝らのうち罪なき者まず石を投げ打て」

と、それだけ一言仰って、また屈み込んでしまった。そうすると、石を持っていきりたっていた連中が一人ずつポトリと石を落として去って行った。年寄りから始めて若者に至るまでという。年寄りというのがいちばん罪が重い。歳を重ねるということはそれだけ罪を重ねるということですよ、心の罪をね。とにかく、みんな一人一人去って行った。小池先生は言われましたよ、

「卑怯者！ ただ黙って去るのではなくて、申し訳ありませんと謝ってから行け」

と（笑）。ところが、ポトリと石を落として一人一人と去って行った。やわら、イエスが立ち上がって見られと、女性の他は誰もいなかった。そこでイエスは言われた、

「お前に石打ちをする人間は誰もいないのか？」



「はい、誰もごいません」

「私も石打ちにしない。もう重ねて罪を犯さないように」

と、それだけ。もう涙が出ますね、この場面というのは。女性にとっては救われた。

「ありがとうございます。命を救っていただきました」

ということだと思います。

イエスはそうやって赦される。赦されたほうの罪は罪です。全部ご自分が引き受けておられる。

「自分が引き受ける」

ということがなければ、こんなことはできない。自分が全部ひつかぶる。だから、あなたを赦す。もしも誰かが石打ちにしようとしたら、イエスはきつと仁王立ちになってかばわれたと思いますね、私は。弁慶が義経をかばったように。そのくらいのお気持ちだと思います。でも、このイエスの言葉に打たれて、一人一人みな去って行った。非常に感動的なお話だと思います。

### ● イエスは世の光

それから、次へいきましよう。

「<sup>12</sup>イエスは再び言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」<sup>13</sup>それで、ファリサイ派の人々が言った。「あなたは自分について証しをしている。その証しは真実ではない。」<sup>14</sup>イエスは答えて言われた。「たとえわたしが自分について証しをするとしても、その証しは真実である。自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのか、わたしは知っているからだ。しかし、あなたたちは、わたしがどこから来てどこへ行くのか、知らない。<sup>15</sup>あなたたちは肉に従って裁くが、わたしはだれをも裁かない。」

この「肉に従って裁く」というのが、外側の上辺で審くこと。

<sup>16</sup>しかし、もしわたしが裁くとすれば、わたしの裁きは真実である。なぜならわたしはひとりではなく、わたしをお遣わしになった父と共にいるからである。<sup>17</sup>あなたたちの律法には、二人が行う証しは真実であると書いてある。<sup>18</sup>わたしは自分について証しをしており、わたしをお遣わしになった父もわたしについて証しをしてくださる。」<sup>19</sup>彼らが「あなたの父はどこにいるのか」と言うと、イエスはお答えになった。「あなたたちは、わたしもわたしの父も知らない。もし、わたしを知っていたら、わたしの父をも知るはずだ。」<sup>20</sup>イエスは神殿の境内で教えておられたとき、宝物殿の近くでこれらのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来てい



なかつたからである。」（ヨハネ8・12～20）  
こうで、

「あなたたちは肉に従って裁く。しかし、わたしはだれをも裁かない。」  
とあります。これはヨハネ伝3章に戻りますと、16節、

「16それ神はその独子ひとりごを賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信する者の亡びずして、永遠とこしえの生命いのちを得んためなり。17神その子を世に遣したまえるは、世を審かんさば為にあらず、彼によりて世の救われん為なり。18彼を信する者は審かさねず、信ぜぬ者は既に審かれたり。神の独子の名を信ぜざりしが故なり。19その審判さだめは是なり。光、世にきたりしに、人その行為おこないの悪あしきによりて、光よりも暗黒くらみを愛したり。20すべて悪を行う者は光をにくみて光に来らず、その行為の責められざらん為なり。21真まことをおこなう者は光にきたる、その行為の神によりて行いたることの顯あらわれん為なり。」（ヨハネ3・16～21）

という有名なところがある。神がその独り子を賜ったほどにこの世を愛してくださった。神が御子を遣わし給うたのは、世を審くためではなく世を救うためであるということが書いてある。イエスはこの8章のところでも、「私は審かない」ということを言っておられる。「あなた方は肉に従って審くけれども、私は誰をも審かない。しかしもし、審くすれば、それは真実である。自分の思いでやらないから。父と共に審判を行うんだから」ということを言っておられる。

「19彼らが「あなたの父はどこにいるのか」と言うと、イエスはお答えになつた。「あなたたちは、わたしもわたしの父も知らない。もし、わたしを知つていたら、わたしの父を知るはずだ。」

そういう答えをなさつておられます。

21そこで、イエスはまた言われた。「わたしは去つて行く。あなたたちはわたしを捜すだろう。だが、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。わたしの行く所に、あなたたちは来ることができない。」22ユダヤ人たちが、「『わたしの行く所に、あなたたちは来ることができない』と云っているが、自殺でもするつもりなのだろうか」と話していると、23イエスは彼らに言われた。「あなたたちは下のものに属しているが、わたしは上のものに属している。あなたたちはこの世に属しているが、わたしはこの世に属していない。24だから、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。わたしは言ったのである。『わたしはある』ということ信じないならば、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。」25彼らが、「あなたは、いったい、どなたですか」と言うと、イエスは言われた。「それは初めから話してゐるではないか。26あなたた



ちについては、言うべきこと、裁くべきことがたくさんある。しかし、わたしをお遣わしになった方は真実であり、わたしはその方から聞いたことを、世に向かつて話している。」<sup>27</sup>彼らは、イエスが御父について話しておられることを悟らなかつた。<sup>28</sup>そこで、イエスは言われた。「あなたたちは、人の子を上げたときに初めて、『わたしはある』ということ、また、わたしが、自分勝手には何もせず、ただ、父に教えられたとおりに話していることが分かるだろう。<sup>29</sup>わたしをお遣わしになった方は、わたしと共にいてくださる。わたしをひとりにしてはおかれない。わたしは、いつもこの方の御心に適うことを行うからである。」<sup>30</sup>これらのことを語られたとき、多くの人々がイエスを信じた。(ヨハネ8・19～30)

この問答も、非常に行き違いですね。文語訳で読んでみますと、

「<sup>21</sup>かくてまた人々に言い給う『われ往く、なんじら我を尋ねん。されど己が罪のうちに死なん、わが往くところに汝ら来ること能わず』<sup>22</sup>ユダヤ人ら言う『わが往く処に汝ら来ること能わず』と云えるは、自殺せんとてか』<sup>23</sup>イエス言い給う『なんじらは下より出で、我は上より出づ、汝らは此の世より出で、我は此の世より出でず。<sup>24</sup>之によりて我なんじらは己が罪のうちに死なんと云えるなり。汝等もし我の夫なるを信ぜずば、罪のうちに死ぬべし』(ヨハネ8・21～24)

### ●わたしはある

文語訳では、「我の夫なるを信ぜずば」と、「夫」という字を当ててありますけれども、新共同訳では「わたしはある」ということになっている。

「<sup>24</sup>だから、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる、わたしは言ったのである。『わたしはある』ということ信じないならば、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。」

「私は在る」は「エゴ エイミ」という原語だそうです。これは私は思いますのには、あのモーセに現れた神さまのお名前は、

「あなたのお名前は何ですか？」

「我は有りて在るもの」

というお名前だった。それは普通に解釈すれば、我々は有ることはできるけれども、しかし、神さまは「在る」といえば永遠に在り続ける。「有りて在る」。決して、有るけれども無くなるというのではなくて、「有りて在る」という永遠に在り続ける、永遠の實在者、そういうお名前だと思う。それを小池先生は更につつこんで、

「ただ在るのではない。ボヤツとして在るのではない。人を有らしめる、人を活か



すような在り方、人を有らしめて在るといふ在り方。有りて在らしめるもの」

というように読みこまれた。それは太陽を見て、そう思ったという。太陽はボヤツと向こうに在るのではない。太陽の存在が地球というものを活かしている、命づけている。太陽が在ることによって、地球は活かされている。そのような太陽の在り方、それが神さまの在り方だ。ただボヤツと在るのではない。「有りて在る」ということは永遠に在るといふことであると同時に、その永遠に在す方が人を活かすといふ在り方。それを受け継いで、イエスは

### 「私は在る」

という。「私は在る」ということは、神さまの在り方と一緒に永遠に在る。ただその場所は、今は地上に在る。しかしやがて、「かぐや姫」のように天上へ帰っていく。やがて向こうへ帰っていく。でも、「私は在る」といふ、これは永遠の事実なんです。そういうふうを受けとりたい。

「そのことをあなた方が信じなかつたら、あなた方は罪の中に死んでしまうよ」

と。これは意味深いですよ。私たちは地上に存在する。地上の生です。ところが、この方は天から降<sup>くだ</sup>ってきた方なんです。天から、天上の生命、愛の生命、永遠の生命、それを携えて降<sup>くだ</sup>ってきたんです。そして救い上げようとなさっている。

「私の中から流れていくものを汲み取つたら、あなた方は永遠に生きる。私を食べ

なさい。信じなさい」

とか、いろんな言葉で言われているのは要するに、

「私を受けとれ。私と一つになれ。そうしたら、あなた方はここで変つてしまう」

ということ。我々の地上の生というのは、いきつくところは死であり滅びなんです。それしかない。「まあ人間というのはそんなもんだよ」と、諦<sup>あきら</sup>めたらそれでもいい。でも、私は諦めきれない。私はそれを承知できない。本当にそうだったら、諦めます。でも、「そうじゃないよ」と言ってくれる方が出てきたんです。

「そうじゃないよ、私と一緒にいてごらん。永遠の生命だよ」

と、そう言つてくださった。

「はいっ、私も一緒にいきますー！」

と。そして、この地上で我々が問題とするものを全部引き上げて、天に昇つた——その船というかな——それに乗せていただいて天上へ昇つていく者は永遠の生命です。ところが、それを拒否して、自分の殻に閉じこもつて、地上の命、地に属する者は、

「これで結構です、地に属するものでそれ以上は何も望みません、と言つて、イエ

スというお方を拒絶していたらそのまま死んでしまうよ」と言つて、それが、

「あなた方はやがて私を十字架にかけて、私を追いやってしまう。その時に初めて



わかるよ」

ということを言っておられる。だから、イエスのお答えというのは、非常に深刻というか、「本気で考えてごらん」と人々に言っておられるわけです。

「あなた方は自分のままでいいの。自分の殻に閉じこもっているだけでいいの。自然現象としての人間の生命は必ず死んでいきます。それで満足なのか。神さまはもつと素晴らしい生命を与えようとなさっている。人は滅びるために生存しているのではない。生きるために生存する生命を与えられた。地上の姿とは別のもつと高次な生命、高次元の生命に活かされる。それが御意なんだ。私は御意を伝えに来た。あなた方は罪の中に留まってほしくない。私を受けとって本当に一緒に天上へ昇ろうではないか」

と言つて来ておられるのに、それを完全に拒否してますと、「あなた方は罪のうちに死ぬよ」という。逆にいうと、「あなた方の中に本当の生命はあるの?」ということ<sup>き</sup>を訊いておられる。

「あなた方の中に生命がありますか? 誰も在るとは言えない、『私は在る』というこの私と一つにならなければ」

と。企業の合併というのがはやっていきますね、このごろ。ヘタリかけている企業を大きな企業が抱きかかえて一緒にという。我々はもうヘタリかけているわけです。それをイエスという生命がきて、抱きあげていつてくださる。相手が何十万、何億人であろうと、イエスは変わらない。凄いい方ですよ、これは。そう思いませんか?

「では、何をしたらいいですか?」

「何もなくていい。私を信じなさい。私を受けとりなさい。それでいいんだよ」

と言うと、「そんなものはつまらん」なんて言う。

「これだけの修行をしなさい」

と言うと、みんなやりますよ。「百万円かせいでこい」と言われれば、一生懸命でかせいできて、「はい、これ百万円!」と、これはやるんですよ。でも、

「そのままでもいい」

と言われると、「なんだつまらない」と。人間というのは本当に愚かではありませんか。

何か「私は生き生きとしている」と、皆さんはきつと思われとおもう。それはこの希望があるからです。この希望があつて——その希望は願望ではない——必ず実現する希望です。空しい願望ではだめですよ。本当のこれは実現する希望です。向こうの世界にはイエス・キリストが輝いておられる。小池先生もその横で輝いているかもしれない(笑)。その他いろいろ皆さんの愛しておられる方々がみんな光輝く姿でそこで待つていてくれる。そういう希望がなかったら、あと段々ロスタイムが迫つてきているんですよ、サッカーではありませんけれども。

平均寿命は、女性は86歳、男性は79歳で、世界一だそうですけれども。やはり女性の方



が長いですね。男性は79歳ですから、もう私の余命は2年しかありませんよ(笑)、平均か  
らいますとね。平均ですから、それより長い人もあるし短い人もある。その長い短いは  
別にして、本当の希望があつて生き生きと生きて、生きている間にいろんな人助けができる。  
それでなければ、向こうへ行つたつてつまらんとする。肩身が狭いですよ。

「あなた、地上ではどうだった?」  
「いや、別になかつたよ」

なんて、悔しいではありませんか(笑)。向こうでたくさんの方が待っていてくれる。

「おう、よく来たね。実は私は天から応援していたんだよ」

「なるほどね、私にできるはずがありませんでしたから。ありがとう!」

とか。そういうのが本当にリアルな世界ですよ。からだの中に染み込んでいるから、歡  
びがこみ上げてくる。そういう姿でこの地上にあるということがやはり、神さまがいちば  
ん喜んでくださることだと思ふ。だから、このヨハネ伝を読みましても、そういうこと  
ですので、昔の話ではない。今の我々の問題なんです。

イエスがこう仰つたものだから、「では、あなたはいつたいたいどなたですか?」とまた言  
出した。「もう前から言つてきているではないか」と、うんざりしておられる。

「<sup>25</sup>彼ら言う『なんじは誰なるか』イエス言い給う『われは正しく汝らに告げ  
来りし所の者なり。』<sup>26</sup>われ汝らに就きて語るべきこと審くべきこと多し、而  
して我を遣し給いし者は真なり、我は彼に聴きしその事を世に告ぐるなり』  
<sup>27</sup>これは父をさして言い給えるを、彼らは悟らざりき。』<sup>28</sup>ここにイエス言い給  
う『なんじら人の子を挙げしのち、我の夫なるを知り、又わが己によりて何  
事をも為さず、ただ父の我に教え給いしごとく、此等のことを語りたるを知  
らん。』<sup>29</sup>我を遣し給いし者は、我とともに在す。我つねに御意に適うことを  
行うによりて、我を独おき給わず』(ヨハネ8・25～29)

これまた大事なところですよ。一二つありますね。

「私の語っていることが本ものかどうかは、あなたが自身に神を求めて、そ  
の心で私の言っていることを虚心坦懐に受けとれば、それで判断できるよ」

というのが一つ。もう一つは、  
「私は御意にかなうことを行っているから、決して神さまは私を見棄て給わない。  
いつも一緒にいてくださる」

この自覚ですね。

「<sup>29</sup>我を遣し給いし者は、我とともに在す。我つねに御意に適うことを行うに  
よりて、我を独おき給わず」

と。あの孤独なイエス、本当に孤独です。兄弟からも誰からも理解されない。全く次元が  
違いすぎて、わかつてもらえない。しかし、



「どんな時にも、この私を遣わされた方は私と一緒に居てください。だから、私は見棄てられることは絶対にありえない」と、そう仰っている。

### ● 本当の自由とは何か

31節から少し場面が変わります。「自由」ということが出てくる。本当の自由とは何か。人間はみな「自由だ、自由だ」と思っているけれども、実はなかなか本当の自由の中にはいない。どうやったら、本当の自由というものをいだけるのかというお話になります。

「31 イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。32 あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」33 すると、彼らは言った。「わたしたちはアブラハムの子孫です。今までだれかの奴隷になったことはありません。34 イエスはお答えになった。「はつきり言っておく。罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である。35 奴隷は家にいつまでもいるわけにはいかないが、子はいつまでもいる。36 だから、もし子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる。37 あなたたちがアブラハムの子孫だということは、分かっている。だが、あなたたちはわたしを殺そうとしている。わたしの言葉を受け入れないからである。38 わたしは父のもとで見たことを話している。ところが、あなたたちは父から聞いたことを行っている。39 彼らが答えて、「わたしたちの父はアブラハムです」と言うと、イエスは言われた。「アブラハムの子なら、アブラハムと同じ業をするはずだ。40 ところが、今、あなたたちは、神から聞いた真理をあなたたちに語っているこのわたしを、殺そうとしている。アブラハムはそんなことはしなかった。41 あなたたちは、自分の父と同じ業をしている。」そこで彼らが、「わたしたちは姦淫によって生まれたものではありません。わたしたちにはただひとりの父がいます。それは神です」と言うと、42 イエスは言われた。「神があなたたちの父であれば、あなたたちはわたしを愛するはずである。なぜなら、わたしは神のもとから来て、ここにいないからだ。わたしは自分勝手に来たのではなく、神がわたしをお遣わしになったのである。43 わたしの言っていることが、なぜわからないのか。それは、わたしの言葉を聞くことができないからだ。44 あなたたちは、悪魔である父から出た者であって、その父の欲望を満たしたいと思っている。悪魔は最初から人殺しであって、真理をよりどころとしていない。彼の内には真理がないからだ。悪魔が偽りを言うときは、その本性から言っている。自分が偽り者であり、そ



の父だからである。<sup>45</sup>しかし、わたしが真理を語るから、あなたたちはわたしを信じない。<sup>46</sup>あなたたちのうち、いつついただれが、わたしに罪があると責めることができるのか。わたしは真理を語っているのに、なぜわたしを信じないのか。<sup>47</sup>神に属する者は神の言葉を聞く。あなたたちが聞かないのは神に属していないからである。」（ヨハネ8・31～47）

この問答はなかなかまた大変な問答がなされています、本当の自由とは何かという。

「いつも私の言葉の中に留まっているならば、あなた方は本当に私の弟子なんだ。そして、真理を知るようになる。その真理はあなた方を自由にする」

と。これは己れを信じたユダヤ人に言い給うた。さつき、「多くの人々がイエスを信じた」とあります。だから、そういう信じたという人々に対してここで本音を言われたわけです。

「本当に私の言葉の中に信じるといふならば、私の言葉の中に留まり続けているならば、あなた方は本当に私の弟子だ。そして、真理を知るようになる。その真理はあなた方に自由を得させる」

と。

「いつつたい、真理とは何だろうか？」

ということです。大学は真理を探求する場なんです。私たちは散々それを聞かされました。

「学問は真理を探求する。大学は真理探求の場である。真理は最後の勝利者である」

とか、そういう言葉を聞いて私は、

「ああ、真理は素晴らしいんだな」

と思いました、学生の頃に。南原繁なんぼらという東大総長が、卒業式や入学式の時に語られる訓示があります。それがちゃんと本になつて出ている。それで感動してたんですけども。

「真理とは何ぞや」

と。学問は真理を探求する。大学は真理を探求する場だと。そして、私は大学に残って真理を探求しようかなと本気で思った。真理とは何かわからないけれども、何となくひかれたわけです。イエスはここでもつと凄いです。

「真理を知ったら、あなたは本当に自由になる」

という。人間は誰でも自由になりたいですよ。

「では、自由とは何なのか？」

ということですね。勝手気儘に好き放題するのが自由なのだろうか。「では、そのとおりやつてごらん」といつつたら、破滅に陥りますね、そんな好き放題なことをやっていたら。人間の性さが、本性が神さまのような本性だったら、好き放題にやつても全部神さまは飲みますよ。ところが、我々が自分の性さが、もしそれがみんな自己中心のエゴイステックな、また非常に欲望に負けやすい、情欲に負けやすい、そういう性さがだったら、それでいたい放題やったら、酒は飲むわ、女を何々するわと、そういう悲惨なる目にあうに決まっている。その行き先



は死である。これは「ローマ書」というところではつきり言っている。

### 「罪の支払う価は死である」

と。それに対しては「義」、神の御意を行うということは生命に至る。そして、そもそも本来は、律法は人を活かすはずのものだったんです。神さまは人を殺そうと思つて、モーセに律法を与えたりしなかった。神さまは、

「お前たちは私の選んだ素晴らしい民である。少々頑かたぐなで頑固だけれども、しかし素晴らしい民だ。諸々の民族が世界中にいる。その中でお前さんたちを選んだ」

と。あとから「申命記」の所でモーセは言ってます。

「選ばれたのは、あなた方が偉いからではない。どうしようもない奴だから、神さまは敢えて選ばれた」

と言っているけれども、選ばれた。そして、

「律法はあなた方を生命いのちへ導く。神の教えのとおりに歩いていけば生命だ。しかし、それに逆らえば死だ。お前たちはどっちを選ぶか？」

「もちろん、生命を選びます」

と、みんな凱歌を上げた。それで律法が伝えられて、それが更に細分化された。生活規範が改まる。ところが、その揚げ句の果ては、イエスが仰つたのが「偽善」、外側だけで何とかやっている。神さまを愛するとか、神を信じるとか、それはどこかへ行つてしまつて、とにかく律法に忠実であるかどうかばかりをみている。内側をみない。上辺うわべだけ見て相手を批判して告発するわけです、

「あいつは違反者だ、また違反した。これをやっつけてしまえ！」

とか。

### ●律法と約束

およそ律法が本来、人を活かすものとして与えられていたにもかかわらず、そこからずれて、人を苦しめる悩ませるものとなってしまった。あのパウロという人が正に、

### 「律法の義という面では、私は何一つ落ち度はない。完璧だ」

と誇っている。その誇っているパウロは何をしたかというところ、キリスト教徒を捕まえては、全部捕縛して祭司長の所へ連れていくという役目をやっていた。ところが、ステパノの姿にうたれた。ステパノは神さまのことを彼らに語って、

### 「お前たちは常に聖霊に逆らっている。だめだ」

と言った時に、彼らは怒り狂つて、ステパノを石打ちにして殺した。パウロはそれに賛成していた。ステパノが殺されて息絶える時に、

「天が開けてイエスが神の右に立っておられるのが見える。主よ、私の霊をお受けください。どうぞ、彼らにこの罪を負わせないでください」



と言って、眠りについたと書いてあります。その姿にパウロは打たれた。そしてしばらくしてダマスコ途上で、突然、天からの光が彼の周りを照らして、

「我は汝が迫害するイエスである！」

と、こうきたんですね。イエスは天界におられて迫害されていないけれども、イエスの弟子たちはみなやられている。

「これは私に対する迫害だ」

と言う。そして、パウロは目が醒めるわけですよ。三日間、食べることも飲むこともできなかつた。目も見えなかつた。アナニヤという人の按手をとおして、パウロは目が醒めた。

「眼から鱗のごときもの落ちたり」

と。それで、

「イエスは救い主だ！」

ということを出したから、もうテンヤワンヤですよ、ユダヤ人の間で。そのパウロが律法についてどう言っているかというところ、ガラテヤ書でちよつとみておきましょう。ガラテヤの信徒への手紙の3章15節から、「律法と約束」という見出しが新共同訳では付いていません。

「15兄弟たち、分かりやすく説明しましょう。人の作った遺言でさえ、法律的に有効となつたら、だれも無効にしたり、それに追加したりはできません。16

ところで、アブラハムとその子孫に対して約束が告げられましたが、その際、多くの人を指して「子孫たち」とは言われず、一人の人を指して「あなたの子孫」と言われています。この「子孫」とは、キリストのことです。

17わたしが言いたいのは、こうです。神によってあらかじめ有効なものと定められた契約を、それから四百三十年後にできた律法が無効にして、その約束を反故にすることはないということです。18相続が律法に由来するものなら、もはや、それは約束に由来するものではありません。しかし神は、約束によってアブラハムにその恵みをお与えになったのです。19では、律法とはいったい何か。律法は、約束を与えられたあの子孫「イエス・キリスト」が来られるときまで、違反を明らかにするために付け加えられたもので、天使たちを通し、仲介者「モーセ」の手を経て制定されたものです。20仲介者というものは、一人で事を行う場合には要りません。約束の場合、神はひとりで事を運ばれたのです。

21それでは、律法は神の約束に反するものなのでしょうか。決してそうではない。万一、人を生かすことができる律法が与えられたとするなら、確かに人は律法によって義とされたでしょう。22しかし、聖書はすべてのものを罪の支配下に閉じ込めたのです。それは、神の約束が、イエス・キリストへ



の信仰によって、信じる人々に与えられるようになるためでした。<sup>23</sup>信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視され、この信仰が啓示されるようになるまで閉じ込められていました。<sup>24</sup>こうして律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となったのです。わたしたちが信仰によって義とされるためです。

25 しかし、信仰が現れたので、もはや、わたしたちはこのような養育係の下にはいません。

26 あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。<sup>27</sup>洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。<sup>28</sup>そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。<sup>29</sup>あなたがたは、もしキリストのものだとするならば、とりもなおさず、アブラハムの子孫であり、約束による相続人です。」

(ガラテヤ3・15～29)

と言っている。ここで初めに約束があった。それから430年経って律法が出てきた。それから千何百年経ってイエス・キリストが現れた。何のために到来したのか。一つは、人間の行為を規律する。そして本来、生命に導くはずだったけれども、それは生命へ導かなかった。律法によつては、人はいかに罪深いかということ、いかに神さまの御意を行えないかということが暴露されるだけだった。つまり、マイナスの役目しか果たさなかった。

「それではどうにもならん」

ということ、あとでイエス・キリストという方が現れる。要するに、イエス・キリストという方が現れるまでの中間期間をしばらく暫定的さんていにこの律法によつて人を導く養育係——養育係の役目は、本もののお母さんが来てくれたら、もうそれにお預けする——本ものが現れるまでの暫定的な導き手にすぎなかった。

「律法」というのは、我々にとつてみますと、あまりピンとこない。我々は直接モーセから律法を受けたわけではありません。それでは、我々にとつては何なのか。これは「良心」の咎とがめとかいいいます、あるいは「道德」とか。我々は我々自身で、

「これはいけない、これは正しい」

とか、善悪の判断をやはりやってきている。ところが——基準は人によつて違うでしょうけれども——とにかく、自分自身で「これは良い、これはいけない」ということがわかっている。ところが、良いというふうにはなかなか満たせなくて、あまり良くない方のパー



セントが多い。それが人間の現実ではないでしょうか。

### ●霊と肉の二重人格

ローマ書は次のように言っています。ローマ書2章9節あたりからみましょう。

「9すべて悪を行う者には、ユダヤ人はもとよりギリシア人にも、苦しみと悩みが下り、<sup>10</sup>すべて善を行う者には、ユダヤ人はもとよりギリシア人にも、栄光と誉れと平和が与えられます。<sup>11</sup>神は人を分け隔てなさいません。<sup>12</sup>律法を知らないで罪を犯した者は皆、この律法と関係なく滅び、また、律法の下にあつて罪を犯した者は皆、律法によって裁かれます。<sup>13</sup>律法を聞く者が神の前で正しいのではなく、これを実行する者が、義とされるからです。<sup>14</sup>たとえ律法を持たない異邦人も、律法の命じるところを自然に行えば、律法を持たなくとも、自分自身が律法なのです。<sup>15</sup>こういう人々は、律法の要求する事柄がその心に記しるされていることを示しています。彼らの良心もこれを証ししており、また心の思いも、互いに責めたり弁明し合つて、同じことを示しています。<sup>16</sup>そのことは、神が、わたしの福音の告げるとおり、人々の隠れた事柄をキリスト・イエスを通して裁かれる日に、明らかにするでしょう。」

(ロマ2・9～16)

こういうふう言っている。ですから要するに、律法が何ものかではない。たとえ律法を持たなくても、心の中に律法をみな持つているはずだと。それに反して疚やましいことをやっている人間は、その結果は滅びなんだ。ところが、天地に羞はじるところがないという、晴々として常に日本晴れという心の人は、祝福の道に入っていく。でも、そんな人はいるんでしょうかと、いつか私は言ったことがありますね。孔子の言葉で、

「うちに省みて疚やましくなかつたら、本当に何も恐いものはないよ」と。それからまた、

「朝あしたに道を聞くならもう夕ゆうべに死んでもいいんだ」

と。そういうふうな晴々とした心、澄みきつた境地に入りたいたいものと申したんですけれども、うちに省みればとんでもない。自分を責めるわけですね。

そのように、律法というのはユダヤ人にとっては特別なものですがけれども、我々人間は、広く人間を考えれば、誰だつて良心というものがある。道徳観というものがある。それからまたいろんな言い伝えや何かで、「これは良い、これは悪い」と聞かされている。教育というものをやはり親から受けるわけです。そういう中にいて、本当に正しい道を歩んでいる人はいいんですよ。

私は、あの二宮金次郎(二宮尊徳)だとか、中江藤樹だとか、ああいう人は本当に素晴らしい人だと思います。あの人たちは何も福音を知らない。けれども、なさっていることは素



晴らしいと思います。それはみな己おのれを誇っていない。己のために何なにごともない。すべては人のため、世のため。それに自分を献けんげているでしょ。これはもう御意みこころに適かなっていますよ。私はそう思っている。

パウロはこのローマ書でいいことを言ってくれています。そんな外側ではなく、その人自身の中に律法を持っている。それでいいんだと。それによって審かれたり審かれなかったりする。ところが、ユダヤ人は律法を持ちながら、みな外れていくわけです。

そして、「いったい、律法は何なのか？」というところ、これはローマ書7章に出てきます。

「7では、どういふことになるのか。律法は罪であろうか。決してそうではない。

しかし、律法によらなければ、わたしは罪を知らなかったでしょう。

これはユダヤ人の立場でお考えください。たとえば、律法が「むさぼるな」と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう。ガツガツ食べても、それが「むさぼり」でよろしくないということがわからない。律法で「御飯は何杯以上食べてはいけない」とか(笑)、そういうことを言われていれば、「五杯も食べてしまった。これはむさぼった」ということになると思ってください。

8ところが、罪は掟おきてによって機会を得、あらゆる種類のむさぼりをわたしの内に起こしました。律法がなければ罪は死んでいるのです。9わたしは、かつては律法とかかわりなく生きていました。しかし、掟が登場したとき、罪が生き返って、10わたしは死にました。そして、命をもたらすはずの掟〔律法〕が、死に導くものであることが分かりました。11罪は掟によって機会を得、わたしを欺き、そして、掟によってわたしを殺してしまつたのです。12こういうわけで、律法は聖なるものであり、掟も聖であり、正しく、そして善いものなのです。

13それでは、善いものがわたしにとって死をもたらすものとなつたのだろうか。決してそうではない。実は、罪がその正体を現すために、善いものを通してわたしに死をもたらしたのです。このようにして、罪は限りなく邪悪なものであることが、掟を通して示されたのです。14わたしたちは、律法が靈的なものであると知っています。しかし、わたしは肉の人であり、罪に売り渡されています。15わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。16もし、望まないことを行っているとすれば、律法を善いものとして認めているわけになります。17そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。

私という人間と、私の中に別の罪という人格みたいのがある。二重人格だという。私は本心では善いことを願っている。しかし、別なやつが私の中に巣くって、それがどんどんあ



らぬことをやる。

「ああ、私は悩める人なるかな！ 誰がこの矛盾だらけの私を救ってくれるだろうか。私は自分では善を望む。しかし、善は行わず、望まないことをやっている。望まないことをやっているのは私ではない。そうだ、お前ではない、お前の中の罪だ。罪を審こうとするが、そんな罪と私とは分離できない、一体だから」

と。そういうことで非常にパウロは苦しんでいるわけですね。

<sup>18</sup>わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。<sup>19</sup>わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。<sup>20</sup>もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。<sup>21</sup>それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまわっているという法則に気づきます。<sup>22</sup>「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、<sup>23</sup>わたしの五体にはもう一つの法則があつて心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。<sup>24</sup>わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか。」(ロマ 7・7～24)

と、赤裸々に書かれている。それを救ってくれたのがイエス・キリストでした。だから、イエス・キリストによつて本当の自由の中に入ると、そういうふうにつながついていく。

### ●イエスの生命と一緒に生きていく自由

そこで、さつきの自由のところへ戻るけれども、ヨハネ伝の自由のところへ行きましょう。要するに、イエスという方を受けとつて、旧き我に死ぬ。旧き我に死んで、イエスという方の生命と一緒に生きていく。それが本当にあなた方を自由にする。それ以外は自由にならないということをご自分で言つておられる。

「<sup>34</sup>……罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である。」(ヨハネ8・34)  
だから、

「私があなたたちを自由にすれば、あなた方は本当に自由になる。私はあなた方を

自由にするためにこの地にくだつてきたのだ」

ということを言われた。ところが、彼らはそれに反対しまして、

「自分達にはアブラハムがいる。自分達はそんな罪の中に生まれたのではない」と言い張るものですから、

「それでは、アブラハムの子孫だと言い張ることができるなら、なぜ私を殺そうと



するか。アブラハムは私を殺そうなんて思っていない」  
「いったい、誰がお前を殺そうなんてしているのだ!？」

といった問答が次にあるけれども、要するに、神さまから出ている言葉を受けとるのは、神さまから生まれた者だけなんです。神さまから生まれていない肉なる人間、地から土から出た人間はどんなにきばってみても、神さまのものを素直にすつと受けとれない。さつきパウロが言ってますように、別の力が働いて邪魔してしまうわけです。しかも、邪魔する力の方が圧倒的に強い。だから、

「私は神の御意に従って善いことばかりしてきたはずだ。その私をあなた方は律法違反だといって、殺そうとしているではないか。律法は人を活かすものだ。私は人を活かしてきた。それなのに、あなた方は律法違反だと外側から私を審こうとしている。本当に内側から御意に従って、あなた方は判断していない」

という争いなんです。だから、

「あなた方がやっていることは、意図せずしてやっているかもしれないけれども、悪魔の手先になってやっているんだ」

と言われた。

「<sup>44</sup>あなたたちは、悪魔である父から出た者であって、その父の欲望を満たしたいと思っている。悪魔は最初から人殺しであって、真理をよりどころとしていない。彼の内には真理がないからだ。悪魔が偽りを言うときは、その本性から言っている。自分が偽り者であり、その父だからである。<sup>45</sup>しかし、わたしが真理を語るから、あなたたちはわたしを信じない。<sup>46</sup>あなたたちのうち、いったいだれが、わたしに罪があると責めることができるのか。わたしは真理を語っているのに、なぜわたしを信じないのか。<sup>47</sup>神に属する者は神の言葉を聞く。あなたたちが聞かないのは神に属していないからである。」

(ヨハネ8・44～47)

これも決定的な言葉ですよ。神に属している人は神の言葉を聞く。神に属していない人は聞けない。しかも逆らう。これは前にありましたヨハネ伝3章へまた戻りますけれども、3章のお終いのところに次のようにまとめられています。文語訳で読みます。

「<sup>31</sup>上より来るものは凡ての物の上<sup>すべ</sup>にあり、地より出づるものは地の者にして、その語ることも地の事なり。天より来るものは凡ての物の上<sup>すべ</sup>にあり。<sup>32</sup>彼その見しところ聞きしところを証<sup>あかし</sup>したもうに、誰もその証を受けず。<sup>33</sup>その証を受くる者は、印して神を真<sup>まこと</sup>なりとす。<sup>34</sup>神の遣し給いし者は神の言<sup>ことば</sup>をかたる、神、御霊<sup>みたま</sup>を賜いて量りなければなり。<sup>35</sup>父は御子<sup>みこ</sup>を愛し、万物をその手に委ね給えり。<sup>36</sup>御子を信する者は永遠<sup>とこしえ</sup>の生命をもち、御子に従わぬ者は生命を見ず、反<sup>かえ</sup>つて神の怒<sup>いかり</sup>（審判）その上に止<sup>とど</sup>まるなり。」(ヨハネ3・31～36)



天と地は断絶がある。我々は地から出る者である。思いもすべてが地に属する者らしく振舞ってしまおう。その行き着く先は死、

「罪の払う価は死である」

という。ところが、神さまは生命のお方ですから、その生命を与えようとして来ておられる。だから、そこに乗り換えなくては、路線転換を計らなければ、延長線上ではだめなんだ。断絶があるという。よく、

「信仰には飛躍がある」

と言います。考えて考えて考えた末に信仰ができあがるのではない。

「信仰というのは飛躍がある。身を投げ棄てなければならぬ。ジャンプが要る」

とか言う。やはり、神さまの霊なる天の次元と、我々の地の次元との間には断絶がある。その断絶を埋めようとして、イエスが人間の姿をとって来てくれた。イエスが人間の姿をとってやって来てくれて、人間の言葉で語ってくれた。それを素直に虚心に聞いて、「ああ、素晴らしい。お弟子にしてください」と誰も言っていない。信じて、すぐにまた問答をぶっかけている。そして揚げ句の果ては、

「十字架につけろ、十字架につけろ！」

でしょ。そのぐらい人間というものは罪深い。

「いや、あれはユダヤの人々がああって、日本にきたらそんなことは絶対にいた

しません」

と言えますか。日本にイエス・キリストがおいでになつてあのように語られたら、みんな

「はっはあ！ まいりました！」

なんて言つて——「これが見えないか」と葵あおいの御紋なら、「はっはあ！」と言つて平伏すけれども(笑)——イエスが何をなすつても、全然「はあ？」とも言わないでしょうね。

「金儲けさせてみせて」

とか、その程度のことかもしれない。そのくらい人間というのは己れというものに囚われてしまふ。自己に囚われる。その行き先は暗い。それに対してイエスは、

「私は世の光である。私の中に歩む者は暗き中を通らない。生命の光をもつ。我は

光なり、生命の光なり。私の中に生命が充満している。それをあなた方に差し上

げたい」

と言われた。そして、病める人を無条件に癒しておられるでしょ。それを彼らは

「律法違反だ！」

といつて、やつつけるんですから、いかに御意と人の思いとが離れているかということが非常に鮮やかに出てますね。それがヨハネ伝ということになります。

それからもう少し先へいきましよう。54節、

「54 イエスは答へになつた。「わたしが自分自身のために栄光を求めようとし



ているのであれば、わたしの栄光はむなし。わたしに栄光を与えてくださるのはわたしの父であって、あなたたちはこの方について、『我々の神だ』と言っている。<sup>55</sup>あなたたちはその方を知らないが、わたしは知っている。わたしがその方を知らないと言え、あなたたちと同じくわたしも偽り者になる。しかし、わたしはその方を知っており、その言葉を守っている。<sup>56</sup>あなたたちの父アブラハムは、わたしの日を見るのを楽しみにしていた。そして、それを見て、喜んだのである。」

これは凄いでしょ。アブラハムは今の私の姿を見て喜んでいるだろうと。そんなことを言われたものですから、彼らは

<sup>57</sup>ユダヤ人たちが、「あなたは、まだ五十歳にもならないのに、アブラハムを見たのか」と言うと、<sup>58</sup>イエスは言われた。「はつきり言っておく。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある。』<sup>59</sup>すると、ユダヤ人たちは、石を取り上げ、イエスに投げつけようとした。しかし、イエスは身を隠して、神殿の境内から出て行かれた。」(ヨハネ8・54～59)

彼らは論争に負けたら、石を投げようとする。けしからんですね。

「アブラハムが生まれる前から私の方が先にいたよ」

なんて、これは霊なるキリストです。天界におられた霊なるキリストです。

### ●初めに十字架の贖いありき

とにかく、昔、父と共に在<sup>いま</sup>ししお方を通して万物は造られたんですから。神さまご自身が直接に造っておられない。神が全部、イエスというお方を通して万物をお造りになった。ヨハネ伝の一番初めにそう書いてあるでしょ。ヨハネ伝第1章を開いてください。

「初めに言<sup>ことば</sup>があった。

この「言」は、

「霊なるキリスト、父と共におられた霊なるキリスト」

と受けとっていただければ、ピタッと合いますね。

言は神と共にあった。言は神であった。

言は神と同性質、同質であったということですよ。

<sup>2</sup>この言は、初めに神と共にあった。<sup>3</sup>万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。<sup>4</sup>言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。<sup>5</sup>光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

<sup>6</sup>神から遣<sup>つか</sup>わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。<sup>7</sup>彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によつ



て信じるようになるためである。8 彼は光ではなく、光について証しをするために来た。9 その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。11 言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。12 しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。13 この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。

14 言は肉となつて、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であつて、恵みと真理とに満ちていた。15 ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしと言つたのは、この方のことである。16 わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。17 律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。18 いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。』(ヨハネ1:18)

こうやってずっとヨハネ伝を読んできて、もう一度戻ってみると、ピツタリきまるでしょ。  
「ことば  
言」というのは

「霊なるキリスト、昔、神と共におられたあの霊なるキリスト」

と、そういうふうを受けとりますと、まさにこのとおりです。そういうお方がこの地上に来てくれた。

神さまがイエスというお方を地上に送りたいというところに、もう愛が示されている。これが決定打なんです。他の誰によつても人は救われなかった。しかも、このイエスという方を最後に切り札として送りくださった。それに対して皆が「はっはあ!」といつて降参してくれたら、もうイエスは十字架にかからなくてよかつたんです。

「みんな一緒に天へ昇つていこう、肩をくんで天へ行こう」

と、イエスは抱きかかえて行かれたはずなんです。ところが、イエスを殺してしまうでしょ。それを自分の定めとしてお受けとりになるわけです。ゲッセマネで苦しんで祈つて、

「やはりこれしか道がないのでしたら、わかりました、御意のとおりにいたします」

と。

「私は常に神の御意にかなうことを行っているから、決して私をお見棄てにならない」



と断言されたイエスを神は棄てたわけでしょ。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

本当にお棄てになったんですね。イエスもお気の毒ですけれども、神さまも、棄てざるを得ない神さまの立場も、大変辛いですよ。神さまとイエスは本当に一つとなって、人間を救い上げようとした。決定打です。十字架の贖いというものは、どんなものを持ってきてもビクともしない。

「信じるの、信じないの」

と、そんなものではない。

「信仰によって義とされる」

なんて、こんなものはウソですよ。だいたい、十字架によって救われた。十字架を受けとることによって救われています。十字架の事実、これが私の中に受肉、化体したときに私は救われています。それが単なる事実だけだったらだめです、出来事ではだめです。それがあなた方、ご自分の一人ひとりの中に受肉——正にキリストがマリアさんの中に受肉したように——今度は、十字架の赦しというもの、復活されたイエス、聖霊となって降ってきてくださるイエス、その全部があなた方お一人ひとりの中に巣をつくる、宿る——「あなた方は宮である」という——そこへ降ってきてくださったときに、本当にそれが完まっうされる。頭で「信じて救われる」と、そんなものではありません。イエスの御業です。

「初めに御業ありき、十字架の贖いの御業ありき」

です。「初めに言ありき」と、イエスはあんなに素晴らしい言葉をほとんどん語ってくださった、人間にわかる言葉で。そして、最後は十字架という事実をもって、犠牲となって、私たちを救い上げてくださった。それも神の御意であった。御意によらずしては何事もなさっていない。そうやってくださった。その事実が私たちに迫ってきて、私たちを捕まえて引つくり返して、この死の体を生命へと変貌させてくださった。これが「救い」という事実なんです。「私は善い悪いの、信じるの信じないの」と、そんなレベルではない。

律法は、外側がみえる世界です。ところが、イエスという方は、内側に宿って、そして

「お前は私と一緒に天国だよ。私が天国だよ。お前と一つになったんだよ。お前はもう天国だよ。一緒に喜ぼうではないか。凱歌をあげようではないか」

と。これが救いという事実なんですね。それを本当に受けとったら、これはじつとしていられないですよ。50歳で受けとられようと、60歳で受けとられようと、20歳であろうと、その時から新しい人生は始まっている。それは勝利の人生です。もう行く先がわかっているんですから。行く先がわかっている。そこは輝いている。そこに向かって進んでいく。上からどんどん助けが与えられてくる。こういうガラツと変わる人生です。本当にガラツと変わる人生に皆さんが導かれているという、これが福音なんです。

福音というのは福よろこびの音ね、音信おしづれです。「すべし、すべからず」ではない。「こんなことやっ



たら神さまにやつつけられるよ」なんて、怖がらせたらだめです。ヒルティは言っている。

「怒りの父だとか、怒れる神とか、そんな概念はぶっこわせ。神がイエス・キリストという方を世に送られたというところに神の愛が表われている。その事実だけでも素晴らしいではないか」

と、『眠られぬ夜のために』の中で叫んでいる。今日は時間がないから引用できませんけれども、この『眠られぬ夜のために』という本を、当時の教会の姿を念頭に置きながら読みますと、「なるほど、なるほど」と思うところがたくさんあります。

まあそんなことで、時間もまいりましたから、この辺にしておきますけれども、どうぞ、ヨハネ伝を我々の身近の書として、日本の現代に生きる私たちにこれは何を迫っているかと、そういう角度から、ご自分のヨハネ伝にしていきたい、「私のヨハネ伝」に——「私の般若心経」とか、「私の歎異鈔」とかありますよ——それぞれのお方の中に染み込むような形でこの聖書を読む。私は文語訳で慣れてしまっているのに、今日は無理してこの現代語訳を読みましたので、たどたどしかつたけれども、それはお許しください。

皆さん、本当にそういうふうにして、馴れ親しんで、歡び輝く、そういう晩年であつていただきたいと思います。これで終わりいたします。

## ● 祈り

それでは最後に、一言お祈りいたします。

主イエス・キリストさま、こうしてこの場にあなたが呼び集めてくださったお一人お一人の中に、あなたが既にお入りくださいました。そして、

「一緒に行きよう、一緒に生命の世界を歩もう。どんな荒波が押し寄せようと、どんなに試煉が待ちうけていようと、私が一緒にいるから大丈夫だ。私は既に世に勝っている、死に勝っている、生命そのものだから」

と。そのようにしてあなたは日々私たちを力付け、励まし、一緒に歩んでくださることを感謝いたします。

どうぞ、ここにお集いになったお一人お一人の中にあなたが光となつて宿つてください、また周りの人々を照らし慰め、励ましていくような、そのような素晴らしい存在としてお導きくださるように、希いたてまつります。今日、おいでになれなかった方にも、どうぞ、あなたの恵みをお分かちくださいますように希いたてまつります。

感謝してこの祈りを今、御名によってみ前にお献げいたします。アーメン。

